

ミュティレネの僭主と調停者

清 永 昭 次

序

古代ギリシア史において、前七世紀半ばごろからほぼ前六世紀いっぱいには、貴族政から民主政への過渡期と称され、広く貴族勢力の弱体化、中流以上の平民の成長、下層平民の没落、貴族対貴族、貴族対平民の闘争の展開といった諸現象が見られ、多くのポリスにおいて立法者・調停者・僭主⁽¹⁾が現れた。かれらはほとんどすべて貴族の出身であったが、その出現の背景には平民勢力の一定の伸長という事実があり、かれらの活動は多かれ少なかれ平民勢力をいっそう成長させ、民主政の成立を促進した。

右のような貴族政から民主政への過渡期について、筆者はかつて多少とも立ち入って概観したことがあるが、この時期の歴史的過程を個々のポリスについて具体的に跡づけようとする⁽²⁾と、たちまち史料の乏しさとという壁に突き当たる。しかし、その点で比較的恵まれているポリスの一つに、Lesbos島の Mytilene がある。それは、おもにその地の抒情詩人

Alkaios の詩が、断片ながら同時代史料としてかなりの数与えられているからである。筆者が過渡期の Mytilene について書いてみようとする第一の理由はここにある。しかし、筆者には別に第二のもっと大きい理由がある。それは、過渡期の Mytilene には Melanchros および Myrsilos という二人の僭主⁽³⁾と Pitakos という調停者が出現したが、これらの人物について、Page および Berre が、かれらの時期の Mytilene の党争の本質は貴族間の対立抗争であって、かれらは平民ないし下層平民の指導者ではなく、平民の支持を背景として政権を握ったのではないと主張して、調停者と僭主に関する通説の理解とは異なる解釈をこの三人に対して下しているからである。通説によれば、調停者は党争する貴族と平民の合意によって選ばれ、むしろ貴族の側により大きな譲歩を求めて両者の調停を図り、僭主は貴族に対する平民とくに下層平民の不満を利用し、かれらの支持を得て貴族政を打倒し、独裁者の地位を手に入れた者である。とすれば、Page や Berre の主張は間違っていないのであろうか。ま

た、もし間違っていないとすれば、それは Mytilene だけの特殊な事例なのであろうか。それとも、過渡期の調停者や僭主、ひいては過渡期全般にわたる従来の通説に再検討が必要となるのであろうか。二人の主張はこのように問ひかけ、その回答を追っているように感じられる。筆者が本稿の作成に取りかかったのは、これらの問にも答えたいと思つてのことなのである。

1 Melanchros

ポリス Mytilene の歴史において最初に登場する人間は、Aristoteles が伝へる Penthiidai である。⁽⁶⁾ Penthiidai の祖 Penthos は、Erigone とはる Orestes の子であり、マイネリス人の Lesbos への植民の指導者である。おそらく二次的ながら Orestes とはる Penthos にもてる伝承もある。⁽⁷⁾したがつて、Penthiidai はかつて Mytilene における王家だったはずであるが、Aristoteles の報告する事件が起こつたころの Penthiidai は、Mytilene の支配権を握つてはいないものの、このポリスに王政を布つていたのではなく、名門中の名門として、Korinthos の Bakchiadai のそれに似た独占的な寡頭支配を行なつていた。⁽⁸⁾

かれらの政權独占と傲慢な支配が、Mytilene の他の貴族の間で反感と不満を鬱積させてつたことは疑いない。Anti-

stoteles によれば、⁽⁹⁾ Penthiidai が歩き廻つて棍棒で人々を打つているところを、Megakles が友人たちと一緒に攻撃して殺し、また、その後、Smerdis は、彼を笞打ち、妻のところから引きずり出した Penthos を滅ぼした。Megakles と Smerdis の身分は確実には分らないが、Megakles が仲間を集めて一種の反 Penthiidai の徒党を組織したように見える点から察すれば、Megakles、そしておそらくは Smerdis も貴族と考へて差支えないであらう。すなわち、右の二つの事件は、Penthiidai の排他的な寡頭政に対する Mytilene の他の貴族たちの攻撃であり、したがつて、Berve が指摘するように、⁽¹⁰⁾ 平民はこれらの事件には関与しなかつた。また、⁽¹¹⁾ Berve は、Megakles の事件の年代を前七世紀の最後の三分の一、Smerdis の事件の前六二〇年ごろに置いているが、およその目安としては妥当であらう。

その後、Penthiidai は史料の上からはほとんど完全に姿を消す。しかし、上記の二度の攻撃がかれらに重大な打撃を与えたことは確かであっても、かれらはなおかなりの名声と勢力を保持していた。ただ、Penthiidai が打撃を受けた分だけ Mytilene の貴族たちの勢力は均等化され、ポリスの支配権を狙うかれらの党争が激化したのではないかと想像される。⁽¹²⁾ かれらの中には、Archeanaktidai とか Kleanaktidai と⁽¹³⁾ いった有力貴族の家があつた。⁽¹⁴⁾ そして、Smerdis の事件のた

ぶん数年後⁽¹⁶⁾ Melanchros が僭主政をうちもたてたことに成功した⁽¹⁷⁾。Page は Melanchros の身分はまったく分からな⁽¹⁸⁾いと記している。直接その点を明らかにする史料がな⁽¹⁹⁾くとはその通りであるが、Melanchros のほかに当時の Mytilene の党争に関与した人物は、本稿が示すように、名前が知られている限り貴族だったと想像されるから、かれもまた貴族の一員と推定する Berve に従ってよいであろう。Page 自身も、他の個所では Melanchros も貴族の中に当然入るような叙述をしてゐる⁽²⁰⁾。

Strabon の伝えによると、Alkaios はその詩の中で僭主 Melanchros を罵つたといふ⁽²¹⁾。また Diogenes Laertios の Souda によれば、第四ニオリキノン紀（前六一一—〇九年）に、Pittakos が Alkaios の兄弟たちとともに僭主 Melanchros を打倒したといふ⁽²²⁾。したがって、Melanchros の僭主政は、協力態勢をとった Alkaios とその兄弟たち、および Pittakos の抵抗を受け、比較的短期間で覆えられたように思われる⁽²³⁾。

Alkaios が貴族身分に属したことは、Page の指摘があるように、その詩句を通して窺われるかれの生活や父祖伝来の財産の所有などから明らかである⁽²⁴⁾。これに対して、Pittakos というのは、Alkaios がその詩の中で Pittakos のことを“kakopatridas”（生まれ賤しき）と歌つてゐるの⁽²⁵⁾、非貴族

の出だつたのではないかとの推測が生まれる。しかし、Diogenes Laertios とかれが引用する Samos の歴史家 Douris によれば、Pittakos の父は名前を Hyrrhachios というトラキア人であった⁽²⁶⁾。また、二世紀の文法学者 Herodians によれば、Pittakos の父の名前は Hyrrhas といふ Mytilene の王になつたといふ⁽²⁷⁾。一方、Thoukydides は、プロボネッス戦争中のトラキア人の一種族 Edones の王として Pittakos という名前を伝えてゐる⁽²⁸⁾。ちがひ、Diogenes Laertios は別の個所で、Pittakos は Penthiios の子 Drakon の姉妹と結婚したと伝えてゐるが、この Penthiios は、あの Smerdis に殺された Penthiios の子とある⁽²⁹⁾。したがって、おそらく Pittakos はトラキアの王族と見られた極めて高貴な血筋に属し、かれの先祖は、Mytilene 人から見れば外人であつたが、その高貴さのゆえに Mytilene の貴族社会の中に受け入れられたのであり、Alkaios も、Pittakos が元をただせば外人の出であることをとらえて、かれを“kakopatridas”と嘲つたのであろう⁽³⁰⁾。Diogenes Laertios が、Pittakos の妻はかれよりも生まれがよく、かれを大に見くだしたと記しているの⁽³¹⁾も、かの女が Mytilene の最も高貴の家柄の出だつたからのごとびあつて、Pittakos が Mytilene の貴族層の外に位置していたことを示すものではな⁽³²⁾。

以上の叙述から明らかになつて、Melanchros の僭主政に

聞つては、Melanchros も、かれと戦つてついにこれを倒した Alkaios や Pittakos など、いすれも貴族であつて、この間の貴族の党争に平民が関与したという報告は何もない。例えば、Melanchros が僭主政樹立の際に平民の支持を得たとか、僭主政維持のために平民の支持をつなぎとめるような政策を行なつたとか、逆に反僭主派の貴族が平民を味方につけようと努力したとかいふ類の伝承は、一切伝わっていない。そして実際、Berve が言つてゐる⁽³¹⁾、この段階の Mytilene の政治の舞台にはまだ平民は登場してゐなかつた、と考えて、つうやうに思われるのである。

II Myrsilos

Mytilene が経験した次の大事件は、Sigeion をめぐる Athenai との戦争であつた。ヘレスポントスの入口を扼するこの地帯には、たゞ Archeanaktidai と属する Archatax が防壁を築き、以来 Mytilene のために確保されてきたが、この要衝に Phrynon の率ふる Athenai 軍が遠征を試みたのである。Mytilene 側は Pittakos の指揮する防衛軍を派遣したが、戦況は思ひしかなかつた。Alkaios も従軍したが、かれが参加したある合戦において Athenai 側が勝利したとき、かれは武器を棄つて逃走した。しかし後に、Strabon にいふ⁽³²⁾、かれが、Diogenes Laertios や Souda にいふ⁽³³⁾、Pit-

takos が、Phrynon からの申し入れに応じてかれと一騎打戦を行なつた、これを討ち取つた。Sigeion 争奪戦はなおもいたが、ついに Korinthos の僭主 Periandros に調停が依頼され、Periandros はその時両者がそれぞれ保持している地を確保すべしと裁定し、その結果 Athenai は Sigeion を、Mytilene は Achilleion を領有することとなつて、戦争は終了した⁽³⁴⁾。

Phrynon が戦死したのは、Eusebios のマルメニア語版 "Chronica" によれば前六〇七／六〇六、Hieronymus 版 "Chronica" によれば前六〇七／六〇六／三年のことであつた⁽³⁵⁾。とすれば、僭主 Melanchros の殺害から Sigeion 防衛戦勃発までの間には僅かの年数しか経つてゐなかつたはずであるから、僭主政打倒のために成立した Mytilene 貴族の結束態勢は、Sigeion 防衛戦勃発時には基本的にはまだ維持されてゐたものと考へられる。

しかし、この戦争は、断続的にせよ、おそらく前六世紀にずれ込むほど、かなり長期間にわたつて行なわれたようであり、その間、相互に勝敗は繰返されたものの、全体として戦局の推移は必ずしも Mytilene 側に有利ではなく、この最後の Periandros の裁定は、Diogenes Laertios が指摘するよう⁽³⁶⁾、明らかに Mytilene にとって不利なものであつた。したがつて、この Sigeion 争奪戦が Mytilene の政治と社

会に深刻な影響を与えたであろうことは、想像に難くない。

第一に、戦争指導に当った貴族は、Siegeion 喪失という失敗のために、その威信を大いに傷つけた。しかも、負け戦の際に武器を投げ棄てて逃げた Alkaios は、恥じる気色もなくそのことを詩に歌って故国に送り、敵将を一騎打ちで倒した Pittakos ないし Alkaios は、楯の下に隠し持っていた網で相手を搦めるといふ方法を用いたのであるが、このような振舞いは、何よりもまず名誉を尊び、廉恥の精神を重んずる貴族にはいかにも似つかわしくないものであった。ここには、古きよき時代の貴族の精神が当時の Mytilene の貴族社会において失なわれつつあった様子が窺われるのであり、そのような状況の中で Siegeion 防衛戦の失敗という事件が起こったとき、平民に対する従来の確固たる貴族支配には動揺が生ぜざるをえなかったであろうと思われるのである。

第二に、Siegeion 争奪戦を通じて Mytilene の貴族は大きな人的損害を蒙った。なぜなら、戦争中の顕著な事件として記憶された指揮官同士の一騎打ち戦が示しているように、この戦争の数々の戦闘において主役を演じたのは、Mytilene 側でも貴族であったにちがいないからである。しかし他方、ギリシアにおける重装歩兵の密集隊戦術の採用年代を前六七五年ごろとすれば、それから七—八〇年を経た Siegeion 争奪戦のころには、中流以上の平民も貴族とともに重装歩兵とし

て密集隊戦闘に加わることが可能となっていたし、Mytilene の貴族にとって Siegeion は是非とも守りぬきたい拠点であったとすれば、かれらは、望ましくはなかったが必要に迫られて、中流以上の平民の密集隊への参加を求め、さらには、重装歩兵の装備を整えることのできない下層平民にも、軽装歩兵としての出陣を要求し、平民たちもそれに応じたであろう⁽³⁹⁾。もちろん、そのために平民の側にも戦闘の犠牲者が出ることはなかったが、それは貴族に比べれば相対的に少なかったはずであり、平民の戦闘参加のより大きな意味は、やはり、かれらの自覚を呼びさまし、ポリス内部におけるかれらの発言力を増大させたところにあった。すなわち、Siegeion 争奪戦は Mytilene の貴族に少なからぬ人的犠牲を強いるとともに、平民、とくに中流以上の平民のポリス内での比重を重くすることになったと思われるのである。

結局、Siegeion 争奪戦は物心ともに貴族勢力に打撃を与え、平民、とくに中流以上の平民勢力を向上させたという点において、貴族政期の Mytilene 史の経過の中で極めて重要な意義を持った。この考えに立って以後の Mytilene 史を解釈することができるか否か、検討してみよう。

Beryte によれば、Siegeion をめぐる戦争終結後 Mytilene では貴族間の競争が再発し、その中から Myrsilos が独裁権を握って僭主となった⁽⁴¹⁾。Myrsilos の身分については、Alkaios

の詩を記したパピルスの一断片に“Kleanaktidan”といふ語があり、その語の記をされてゐる行の欄外の註で“(on) Myrsili(on)”とあることが手掛りを与へる。⁽⁴²⁾ 確かに Strabon は Alkaios が詩の中で觸及した Mytilene の僭主として「かれ (Pittakos) とその他の者たち、すなわち Myrsilos と Melanchros と Kleanaktidai と他の若干の者たち」を挙げ、⁽⁴³⁾ Myrsilos と Kleanaktidai は別のところに伝へてゐるが、⁽⁴⁴⁾ 確言するに及ばぬが、Myrsilos を Kleanaktidai の一員と見なすことは不可能ではななうであらう。とすれば、Myrsilos と Mytilene の貴族層に属してゐたこととなる。

Alkaios の別の詩に対する古註によれば、Myrsilos は Mnemon なる者が提供した一隻の輕舟によつて帰還したと云ふ。⁽⁴⁴⁾ これは、その外 Lesbos 島外、小アジア本土の亡命先から Mytilene への帰還と見て間違いないであらう。そして Myrsilos はかゝる僭主 Melanchros の徒党であつたので、Melanchros の支配が覆えられたのも亡命してゐたのが、Sigeion 争奪戦後の Mytilene の党争の再燃に乗じて帰國したのだと見る Berve の見解⁽⁴⁵⁾ は、かなり説得力があるやうに思われる。

Myrsilos とその僭主政樹立の経過や方法について、確かに何となく何となく分らない。しかし、党争に採まれる祖國を風の海で飄弄される船に喩へた Alkaios のある詩⁽⁴⁶⁾

に対して、後一世紀の作家 Herakleios が「この詩を記してゐるのは Myrsilos であり、また Mytilene 人に対して企てられた僭主政の陰謀 (tyrannika systasis) である」と註している言葉から、Myrsilos が僭主政をやや立てたことであつて、協力する若干のおそらくは貴族の仲間があつたことが窺われる。例へば、Mnemon などがその一人であつたことは間違いないであらう。Alkaios が Myrsilos の帰國を助けた Mnemon を非難し、これと戦つた時期があると考えられること⁽⁴⁸⁾、Myrsilos が當時の Mytilene によつて取るに足りない人物ではなく、むしろ貴族の一員であつたとの推定を強める。しかし、上述の Herakleios の註記を以て、僭主政樹立の陰謀を推進した人物として Myrsilos の名前しか挙げられていないという事實は、Mnemon はやはり Myrsilos を助ける役割を担つたこと⁽⁴⁹⁾、例へば Pittakos とつた Myrsilos に匹敵する人物はこの陰謀に加担しなかつたことを示すやうに思われる。同様で、安全な港を求めて風の海上に浮かぶ船に祖國をなぞらへた Alkaios の一つの詩に付した Herakleios の言葉でも「かれ (Myrsilos) によつてひき起こされたこと」⁽⁵⁰⁾とあつて、僭主政の樹立が Myrsilos を中心として実現したことを確認させるやうに見える。すなわち、Sigeion 防衛戦の失敗後 Mytilene の貴族間にまたたび党争が起つたり、その混乱に乗じた Myrsilos が、

自分のまわりに若干の貴族を集めて僭主政の樹立を図ったとき、その他の貴族は、Alkaios や Pitakos を中心として反 Myrsilos の立場において結集し、一致協力するようになったと思われるのである。

一方、Alkaios の詩の一断片の下欄の註に、「Pyrrha と Mytilene の間でかれらは護衛兵の若干を……かれは Bakchis に言う……なせなら、Myrsilos は……」との一句が見出される。⁽⁵¹⁾ Myrsilos が護衛兵を抱えていたことがここから推測される。確かに、Berve が指摘するように、⁽⁵²⁾ 厳密に言えば上記の古註は Myrsilos が護衛兵を持っていたことを確証するものではないが、そこまで慎重に考える必要はないであろう。

もっとも、Myrsilos が護衛兵を持つようになったのは、僭主になるまえからであったのか、その後のことであったのか、明確に決定することはできない。⁽⁵⁴⁾ しかし、Myrsilos はかつて僭主 Melanchros の徒党に属していたとすれば、小アジア本土に亡命中から次はかれ自身が僭主となる野心を抱いており、したがって、Mytilene への帰還もその意図の速やかな実現を第一の目的としていたものと考えられる。そして差当り、かれは従来通り貴族の党争の枠の中で目的を達しようと考えて、自分に味方する貴族を集めたのであるが、その貴族勢力が弱体であったとすれば、自然に護衛兵の武力に頼ることを思いついたであろう。その場合、小アジア本土と深

い関係を持っていたらしいかれであるから、亡命先で小アジア原住民を護衛兵として備い入れた可能性もなくはない。しかし、先に挙げた史料が、⁽⁴⁴⁾ Myrsilos は一隻の軽舟によって Mytilene に帰還したと伝えている状況から察すると、そのような可能性は否定されるように思われる。とすれば、かれは Mytilene 帰還後に Mytilene の平民、それも重装歩兵としての武力を備えていた中流以上の平民でなく、下層平民の中から護衛兵を備い入れたとする考え方が残ることとなる。すなわち、Myrsilos は、かれのまわりに集めることのできた Mytilene の若干の貴族と下層平民の護衛兵をバックにして、Mytilene 帰還後まもなく Alkaios の党派を抑えて僭主政の樹立に成功したと考えられるのである。⁽⁵²⁾

このように想定した場合、その後の Mytilene の党争の動きを伝える史料の一つに、Alkaios の詩の一断片と付された欄外の註がある。そこでは「Alkaios の仲間が Myrsilos に対して陰謀を企らみ、……罰せられるより先か Pyrrha に亡命した、最初の亡命に際して」と記されており、⁽⁵⁵⁾ 反 Myrsilos 派の貴族が僭主打倒を企てたが、失敗して Lesbos 島内の Pyrrha に逃れたことが分かる。ここで注意すべきは、この史料においては陰謀の対象として Myrsilos の名前しか挙がっていない点である。⁽⁵⁶⁾ これは、Myrsilos 派の貴族はいぜんとして弱体であって、Pitakos のような有力貴族はなお反

Myrsilos 派に属していたことを暗示すると解してよいであろう。⁽⁶²⁾

したがって、Pitakos が「*Alkaios* など」として Pyrrha に亡命したと思われるが、やがてかれは *Alkaios* の党派と袂を分かち、Myrsilos の側に付くこととなった。⁽⁶²⁾ *Alkaios* の詩の一断片は、Zeus 以下三柱の神に苦しむ亡命からの解放を祈り、また、かつととも蓄した蓄いを平気で踏みじり、祖国 (*polis*) を食い尽くしている、*Hyrtas* の子にして太鼓腹の *Pitakos* の追求を復讐の女神に願う、いま勝利者となっているかの人々に殺されて地に横たわるか、あるいはむしろかれらを殺して市民 (*damos*) を苦悩から解放しよう、と歌っている。そして、この断片の二八行目に Myrsillo (*Myrsilos*) とする言葉が見えている。その前後の部分に欠けているために確かな文脈は不明であるが、*Pitakos* が僭主政打倒の蓄いを破り、Pyrrha に亡命中の *Alkaios* の党派を裏切つて、*Myrtiene* を支配しようとする *Myrsilos* のもとに走った、という事情がこの詩の断片の背景にあると推定して、たぶん間違いないであろう。

Pitakos と *Myrsilos* の同盟の実現には、両者が「*トラキア*」とか小アジアといった、ブルボロイの地域とつながりを持っていたという点で共通していたことも、無関係ではなかったかもしれないが、それまで敵対関係にあった両者の和解の成立

には、もっと強い動機があったように思われる。そして、その動機を推測するための手掛りとなるのが、すぐ前に引用した *Alkaios* の詩の断片に現われる「市民」(*damos*) という言葉である。Page は、*Alkaios* の現存の詩の中では二つの断片しか現われない、*damos* について、この言葉は、貴族に対する平民ではなく、主権を握っている王・僭主・寡頭派支配者と対照される、貴族を含めた全市民を意味すると述べており、⁽⁶⁴⁾ 大筋において妥当な見解と言つてよいであろう。ところが、*Alkaios* は、右に引用した詩の断片では「市民 (*damos*) を苦悩から解放しよう」と歌っている (二〇行)。また、「*damos*」という言葉の現れる後述の残る一つの断片では、⁽⁶⁶⁾ 市民 (*damos*) が破滅に導かれることをかれは憂えている (二二行)。つまり、*Alkaios* は全市民の立場に立って党争を戦っていたことを示すかのように見える。しかし、*Myrtiene* におけるその後の事件の経過を見れば明らかであろう、*Alkaios* は決して「*damos*」すなわち *Myrtiene* の市民に受け入れられなかった。したがって、詩句の中でどのような表現がなされようと、*Alkaios* とその党派は、昔ながらの貴族支配を頑固に維持しようとする、*Myrtiene* における保守的な貴族であつて、かれらの目標は、平民をも含めた全市民の救済などというものではなく、かれら自身の地位と利益の擁護に集中していたと考えられるのである。

Mytilene の名門中の名門たる Penthiidai と姻戚関係を結んだことからも想像されるように、Pittakos も元来は Alkaios とその立場を同じくしており、それゆえにこそ、これを ⁽⁶⁵⁾ Mytilene と行動をとらだとしてきた。しかし、かれは、Siegeion 防衛戦に失敗したのち、Mytilene の貴族はもはや昔日の勢力を回復することができず、他方、平民、とくに中流以上の平民の成長を無視することができないという事実を ⁽⁶⁶⁾ 十分に悟るようになり、この事実 ⁽⁶⁷⁾ に気付こうとしない Alkaios との間 ⁽⁶⁸⁾ に溝を生ずるようになったのではないかと思われるのである。

一方、Myrsilos も、もともと、集団であろうと個人であろうと貴族によるポリスの支配を当然のこととし、平民、とくに中流以上の平民の成長を正当に評価しないという点では、Alkaios や Pittakos と同様であった。かれが護衛兵を置いた直接の目的は、強力な反 Myrsilos 派の貴族勢力に対抗して僭主政の樹立を成功させるためであったが、同時に、僭主政に対する中流以上の平民の抵抗を阻止する意図も含まれていたように思われる。自己の力を自覚しつつあった中流以上の平民が、独裁に反撥しなかつたはずはない、からである。一方、Myrsilos の僭主政樹立に協力した貴族は、多かれ少なかれポリスの支配に参加する機会を与えられたかもしれないが、⁽⁶⁹⁾ 僭主政が続くにつれてかれらの間にも独裁政治へ

の不満が増大していったにちがいない。⁽⁷⁰⁾ さらに、すぐ後に述べるように、自覚と不満は下層平民の間にも生まれつつあった。したがって、Myrsilos は、その僭主政遂行の経過中にしだいにより大きな困難に直面し、平民、とくに中流以上の平民の力に対する認識を強いられるようになったであろう。他方、かれを取り巻く貴族も元来平民とは対立する立場にあったが、同じく平民の存在を無視するわけにはいかないことに気付かされるに至ったであろう。

Alkaios の詩の一断片に民会 (agora) (一八行) と評議会 (bolla) (二〇行) が現れる。この断片の中で、かれは互いに傷つけ合う市民たち (politai) から切り離されて辺境の田園に亡命し、一人みじめに暮しながら、故国の民会と評議会の審議を聞きたいと切望している。⁽⁷¹⁾ 確かに、評議会は貴族の会議であり、例えば、前五七五—一五〇年ごろの Chios⁽⁷²⁾ における貴族の評議会と並ぶ「平民評議会」(boule demostie)⁽⁷³⁾ のようなものは、Mytilene には存在しなかった。また、民会の支配権も貴族の手に握られていたであろう。しかし、とにかく当時民会は機能しており、しかも、有力貴族たる Alkaios が「民会の審議を聞く」(agoras akousai) と述べているところから推察すると、平民、少くとも中流以上の平民は、民会においてまったく無言、無力な存在というわけではなかったように思われる。そして、民会におけるそのような中流

以上の平民の地位は、言うまでもなく、Sigeion 争奪戦を契機とするかれらの軍事的重要性の増大や、商業貿易関係の発展に基づく平民の商工業者の成長といった事実を支えられていたのである。

一方、下層平民は生活の不安と経済的没落の危険にさらされている階層であり、中流以上の平民に比べれば、その力も遙かに弱かった。しかし、軽装歩兵としてでも Sigeion 争奪戦に動員されたことは、かれらにもその力についての自覚を呼び起こしたであろうし、また、かれらの経済的困窮に対する不満の気持も、しだいに大きくなる傾向にあったであろう。Myrsilos が護衛兵を抱えたことは、一定数の働き口を下層平民に与えることでもあったが、それだけでは、もちろん、かれらの窮乏のすべてを除去することはできなかった。

Pittakos と Myrsilos、および Myrsilos を取り巻く貴族が、平民、すなわち、中流以上の平民の実力を評価し、下層平民の現状を正しく把握しなければならぬとの認識に到達したのは、平民のこのような状況を前にしてのことであった。かれらは、Alkaios とその党派に対して、いわば Mytilene をける開明派の貴族に転化した。この共通性のゆえに、Pittakos は Alkaios 派の将来に見限りをこけ、Myrsilos は Pittakos の協力を期待して、ここに Pittakos と Myrsilos の和解、Pittakos の Mytilene 帰還が実現した。

また、Myrsilos を取り巻く貴族も、平民との対立の打開に有用な人物として、さらに、平民もおそらくすでに Pittakos の政治的立場の変化について知っていて、ともに Pittakos を受け入れたものと思われる。とすれば、Pittakos による Alkaios から Myrsilos への同盟の相手の変更は、貴族間の党争の経過中の単なる二つの乗り換え事件ではなく、Mytilene における下層平民の自覚と不満の増大、および、とくに中流以上の平民の勢力伸長という事実がなければ、起こらない出来事だったのである。

Myrsilos の僭主政の継続期間は不明であるが、Sigeion 防衛戦の終結が前六世紀に入ってからであり、また、Pittakos が調停者選ばれたのは前五九〇年ごろのことと考えられるから、前六世紀の初めの十年足らずが、Myrsilos の支配の期間と見て、大きな誤りはないであろう。それは、前五九〇年ごろかれの突然の死をもって終りを告げた。「いまや飲むべし、痛飲すべし、Myrsilos が死んだのだから」といふ喜びの感情を爆発させた Alkaios の詩の断片が、Myrsilos の死が予期しないときに急に起こったことを推測させる。Berve と Andrewes は、それが自然死であったか暗殺であったか不明としているが、暗殺と見る方が自然であろう。もちろん、暗殺者は分からないが、Myrsilos の僭主政への不満を募らせ、しかも、実力を持っていた者、おそらく、中流

以上の平民が僭主を取り巻く貴族の仕業だったと考えられる。Myrsilos は時代の変化を察知し、かれなりに新しい状況に対応すべく努力したであろう。しかし、みずから進んで僭主の地位を放棄しない限り、かれの努力には限界があった。⁽⁸⁰⁾かれはいわば独裁者として越えることのできなげ壁にぶつかって倒れたのであるが、そこにも、Mytilene における平民、とくに中流以上の平民の成長の事実がからまっていたのである。

III Pitakos

Myrsilos が死ねば、Alkaios の党派は勇躍して Mytilene に帰還した。⁽⁸¹⁾Pitakos と Myrsilos の和解、同盟の成立について考察した前節の個所から明らかなように、Myrsilos 亡き後の Mytilene に残った Pitakos、かれを受け入れた貴族、中流以上の平民、および下層平民の四者いづれも、Alkaios の党派に対しては対立する立場にあったが、その四者のうちの貴族と中流以上の平民と下層平民の間には、また本来それぞれ利害の対立があった。したがって、Myrsilos の死によって共通の敵がなくなつたとき、その対立関係が一時的ながらいつそう顕在化したために、Mytilene の反 Alkaios 諸勢力は、Alkaios の党派の Mytilene 帰還を協力して阻止することができなかつたのではないかと思われる。

しかし、Alkaios の党派の帰還を許してしまつてから、Mytilene の反 Alkaios 諸勢力はいまさらのように事の重大さに気がつき、Pitakos を中心として急ぎふたたび協力態勢を整え、Alkaios の党派の追放に成功し、引続いて Pitakos を、市民によって選ばれた僭主ともいふべき「執政」*aisymnetes* という役に選んだ。その事情を Aristoteles は、「かれらはみな一緒になつて (aolles) 生まれ賤しき Pitakos を大いに称讃し、かれを胆玉のない不運なポリスの僭主に据えた」という Alkaios の詩の断片を引用しながら、Mytilene 人が、Antimenides と Alkaios を指導者とする亡命者に当らせられたため、Pitakos を僭主に選んだ」という形で伝えている。⁽⁸²⁾Myrsilos の死について述べた個所ですでに示唆したように前五九〇年ごろの Myrsilos の暗殺から Pitakos の執政就任まで、事件は急速に展開したと考えてよいであろう。

Page と Berve は、Pitakos は平民ないし下層平民の指導者ではなかつたことを強調している。⁽⁸³⁾確かに、Pitakos は平民ないし下層平民だけの指導者ではなかつたという意味ならば、その通りであろう。しかし、右に引用した Alkaios の詩の断片が、Mytilene 人は「みな一緒になつて」(aolles) Pitakos を僭主に据えたと言っている、その “aolles” という言葉の中には、貴族はもちろんであるが、下層平民をも含

めた平民も当然考えられていたはずである。したがって、この場合「aolées」が含む範圍は、Alkaiosの用法では「市民」(damos)の範圍と同じでもあった。しかし、かれにとつては「damos」という言葉は、Mytileneの市民全体を意味しはするが、それによつて貴族を中心とした部分がまず意識される。そういう概念であつた。(85)とすれば、Pitakosを執政に選んだ Mytilene 人によつて、Alkaios が「damos」という言葉を用はず、「aolées」という言葉を選んだことには、重要な意味が隠されてゐるように思われる。すなわち、さすがの Alkaios にも、この時の Mytilene 人の中には貴族の他に、平民、それも下層平民の存在までも見えたといふことが、「aolées」という言葉の使用によつて暗示されてゐるのではないであらうか。そして、すでに述べたやうに、Myrsilosの死の直後に一時激化の動きを見せた Mytilene 人の対立において、貴族と中流以上の平民と下層平民が、それぞれ別個の要求を持つ別個の集団として活動し、この三者全体の合意によつて Pitakos が執政に選ばれた、という事実があつたのであり、Alkaios にもその事実が認識されたといふことだつたと思われるのである。

Alkaios の党派は、今回は Lesbos 島の外に亡命しなけれ
ばならなかつた。Alkaios は Homeros (86) Antimenes は、
Korinos (87) として抒情詩人 Sappho は シンリーに亡命した
(88)

と考えられてゐる。(89) Sappho が Mytilene の貴族層に属して
いたといひては、例えは、かの女がしばしば兄弟 Larichos
のことを、かれがブリュタネイオンで Mytilene 人のために
葡萄酒をついたと言つてはめ称えてゐることなどが、史料上
の証拠として挙げられる。(90) Page は、Sappho の詩の断片で
政治に関係するものは極めて少ないが、もしかの女に政治的
立場があつたとすれば、Alkaios の党派に共感を寄せたであ
らうと述べてあり、(91)この見解は妥当である。したがつて、か
の女が Mytilene の党争に関与したとすれば、おそらく終始
Alkaios の党派の側を立つ貴族の一人としてであつた。

Burn は、Alkaios の党派の Lesbos 島の外への亡命先が
ばらばらであつたのは、かれらが Pitakos に指導された
Mytilene の市民に敗れたことから仲間割れを生じたためだ
であると推測してゐる。(92)この推測の根拠となる史料は、「damos」
という言葉が現れる Alkaios の現存の二つの詩の断片のうち
の残る一つであり、Alkaios はそこで「Atreus 家の者と
結婚したあの男 (Pitakos) に、かれが Myrsilos と一緒に
なしたやうに、祖国 (polis) を貪欲に食わせよ。」(六十一
行)と反語的に警告し、また「オリュンポスのある神が、
《市民》(damos) を破滅に陥れ、Pitakos には喜ばしい栄光
を与えようといひき起ごした、心を食ひ尽くす分裂と同族の
戦ひ (emphylos mache) を抑えよう。」(一〇一—一三行)と卑

ひかけている。Myrsilos の死に乗じて Mytilene に帰還した Alkaios の党派が、Pittakos に敗れる前からとも、その後からとも考えられるが、それはともかくとして、かれらのあいだに仲間割れが生じて、それが亡命後まで持ち越されたことを、この詩の断片から想定することができよう。なお、この詩における“damos”も平民の意味ではなく、したがってこの段階で Alkaios 派が戦った相手は、Pittakos と指導された Mytilene 市民全体であったことは言うまでもない。

Diodoros と Diogenes Laertios は、Alkaios が Pittakos に捕えられたが釈放されたことを伝えている。おそらく、Lesbos 島の外に亡命した Alkaios の党派は、一度武力で祖国帰還を試みたが、失敗したのであろう。そして、その試みを援助したのが、リュディア王国の当時王子で、Lesbos 島対岸の小アジア地域の王国領総督の Kroisos だつたのではないかと思われる。なぜなら、Alkaios の詩の一断片が、リュディア人 (Lydoi) が Alkaios の不運を憤り、Alkaios が聖なる祖国 (polis) に入ることができればと、二十スタテールをかれらに与えたこと (一—四行)、智謀にたけた狐のような男が事はやさしいと予言し、しかも見破られないと思つてしたこと (六—八行)、を語っており、「リュディア人」の代表は Kroisos、聖なる祖国は Mytilene、狐のよう「な男」は Pittakos と想定されるからである。(86) そして、その

推測はまた、またたび Diodoros と Diogenes Laertios が、Kroisos が Pittakos に多額の金銭の提供を申し出たと、Pittakos は受け取るのを拒絶したと伝えていることに支えられて、(86) たゞん、Lesbos 島対岸のリュディア王国領の総督であった Kroisos は、Lesbos 島内への王国の勢力浸透を図り、まず Pittakos を買収しようとしたが失敗したので、一転して Alkaios の党派と接近し、Alkaios の党派は Kroisos の仲介で和解して、Lesbos 島対岸のリュディア王国領に集合し、かれから資金援助を受けて、Mytilene 奪還の遠征を試みたが、失敗したのであろう。(87)

Page は、Pittakos が執政に任ぜられた後の期間に、Alkaios の党派がかれに対して勝利を取めたことが一度はあった可能性を指摘している。(88) 一方、Berve は、少数の例外は別として、亡命者たちの Mytilene 帰還が実現したのは、Pittakos の死後だつたらうと推測しているが、そのことは、Alkaios の詩の一の古註によつても裏付けられるように思われる。(89) なぜなら、その古註は、対応する詩によつて Alkaios が、かれの党派は敵どもに終ることのない戦いを挑むであらうと歌っていることを想像させ、その敵どもは、たゞん、執政の Pittakos を中心とする人々だつたと見ることが出来るからである。したがって、小さな勝利は時にあつたかもしれないが、Kroisos の有力な援助を受けたものをも含め

て、Alkaios の党派の帰還の試みは、Pitakos の存命中はことごとく目的を達しなかったと考えられるのであって、そのことは、Pitakos 指導下の強力で安定した Mytilene の姿を暗示すると言わなければならない。そして、そのような Mytilene の姿は、おもて執政としての Pitakos の国内政策によってもたらされたものであった。そこで、次にかれの国内政策についても少しく考察を加えてみよう。

Pitakos はさまざまな法律を制定したが、独特なのは、酒に酔って人を打つなどの罪を犯した者は、しらふの犯罪者よりも重く罰せられるという法律であった。また、他人の葬礼への参加は、人が多く集まると悲しみが増すからとの理由で禁止された。飲酒の機会となる饗宴や会葬者の多い盛大な葬礼は、貴族の間で特徴的なものであったから、これらの法律は、Pitakos が Mytilene の貴族に対して規制を加えたことを意味するであろう。Strabon は、Pitakos のこうした対貴族政策を、かれは寡頭支配 (dynastical) を解体させるために一人支配を行使したという表現で概括している。

他方、Aristoteles の弟子であった Theophrastos の『契約論』(Peri symbolaion) によれば、Pitakos は、売却と公示は、「王たむ」(Basileis) をよびブリュタニス (prytanis) という役人のもとで行なわれるべきことを規定した。「王たち」とブリュタニスはいずれも高級役人であり、ことに後者

はその年々の最高役人であって、執政たる Pitakos 自身はその地位を占めていた可能性がある。とすれば、この規定によって、売買行為は当事者だけの手に任せられないで、Pitakos 以下の高級役人の監督のもとに置かれたことになり、土地・家屋の取引をも含めた売買行為において弱い立場にあった平民、とくに下層平民の保護が図られたと解することができるであろう。また、Alkaios の詩の一片断は、明瞭ではないが、Pitakos が護衛兵を抱えていたことを教えるように見える。もしこの解釈が正しければ、Pitakos は、Myrsilos 時代に引続き、下層平民に護衛兵としての働き口を提供したことになる。かれは、Alkaios の党派の不意の攻撃に備えるために、護衛兵を持つ必要があったのであろう。さらに、Herodotos の伝えるところによれば、ヘジプトの Amasis 王 (在位前五六九—五五九年) 時代に、Naucratis に渡航して一時滞在したギリシア人は、王から与えられた土地にヘリオンと称する共同の神域を設けたが、その建設に与ったポリスの一つが Mytilene であった。これは、当時 Mytilene がヘジプト貿易に活発に従事していたポリスの中に入っていたことを示すと見てよいが、そこで、商工業者である平民の成長を図った Pitakos の努力の成果を認めることができるであろう。

しかし、Pitakos は国制の制作者ではなかったという。し

たがって、貴族優位の従来の国制には変更、少くとも顕著な変更は加えられなかつたはずである。先に挙げた売買行為に關する規定の中に現れる「王たち」とかブリュタニスといつた高級役人は、明らかに、貴族政期を通じて続いてきたものであり、その他の官職をも含めて、役人、とくに高級役人に選ばれたのは、いぜんとしてほとんど貴族であつて、平民が任ぜられることは、確かになくはなかつたにしても、まだ少なかつたにちがいない。

Pitakosは、僭主政・党争・戦争といふ三つの最大の不幸から祖国を解放したと言われる。かれは十年間にわたり國家を支配して、少数有力者の支配を解体し、國家に秩序を与えたいでこれに自治を返し、職を辞したが、その後なお十年生きながらえた。すでに述べたように、かれの辭職の年は前五八〇年ごろ、死んだのは前五七〇年ごろと考えられる。

以上のような執政としての Pitakos の国内政策を要約すれば、貴族の勢力を押え、下層平民をも含む平民の地位を強化するものであつたが、同時に貴族優位の国制は維持した、と言ふことができるであらう。それは、まさに相争う貴族と平民の間に立つて両者の和解を図る調停者の政策であつた。かれが Mytilene の市民全体によつて執政の役に選ばれた直接の目的は、亡命した Alkaios の党派の反撃を阻止することであつたが、同時に、市民は、貴族と平民間になお根深い対

立關係があり、また、平民が貴族に対してさまざまな不満を持つてゐるのを認めて、それらの対立と不満を除去する調停者の役割を果すことをも含めて、ほとんど独裁者に近い執政の地位に Pitakos を任じたのである。かれの十年間の統治によつて Mytilene に秩序と安定がもたらされたことは、その統治の成功を物語つてゐる。すなわち、Pitakos は、Myrsilos なぎあと、動搖と対立の中にあつた Mytilene の貴族、中流以上の平民、下層平民のすべてがかれに託した調停者としての任務を見事に達成し、亡命貴族以外の Mytilene 市民全体の満足をかち得ることができた。確かに、Pitakos は平民ないし下層平民だけの指導者ではなかつた。しかし、中流以上の平民と下層平民は、当時の Mytilene においてすでにそれぞれ別個の集團として存在するようになつており、Pitakos はかれらの存在を認識し、かれらの要求にも応えようと努力し、したがつて、かれらもまた Pitakos に支持を与えた。Alkaios と絶つて Myrsilos と結んだ後の Pitakos を理解するには、かれと平民とのこのような關係を把握することが不可欠のように思われるのである。

結 び

序において紹介したように、Page と Berve は、前七世紀後半から前六世紀前半にかけての Mytilene の歴史は、貴族

と貴族との党争であつて、平民ないし下層平民の指導者として権力を握り、それを維持した者は一人もいないと主張している。⁽²⁾確かに、この時期の Mytilene の党争において名前を知られて登揚し、かつ重量な役割を演じたのは、Penthildai から Pittakos まですべて貴族であつた。また、これらの中には、平民ないし下層平民だけの指導者は一人もいなかった。さらに言えば、僭主 Melanchros の打倒までの党争は、貴族だけによつて演ぜられたと解して差支えない。しかし、Mytilene 防衛戦に失敗したころから事情が變つた。すなわち、まず、軍事的な重要性を裏証した中流以上の平民の存在と自覚、ついで、経済的困窮に直面しつゝあつた下層平民の不満、を無視することができなくなつたのである。その事実に気付いたのは僭主 Myrsilos と Pittakos であり、あくまで認めようとしなかつたのは Alkaios であつた。しかし、Myrsilos は、平民の要求に対応しようとする努力はしたが、独裁政の放棄に踏み切ることができなかったがゆえに、打倒された。これに対して、Pittakos は、平民の存在と要求に適切な配慮を払つたがゆえに、調停者としての成功をかちとることができた。一方、Alkaios は、平民の成長の事実の認識を拒否し続けたがゆえに、結局は時代の動きに取り残される生涯を送らなければならなかつた。

したがって、前六世紀以降の Mytilene においては、市民

団の中の独立の自覚的な集団としての平民——中流以上の平民と下層平民の存在が、党争の進行に明らかに影響するようになったのであつて、Page と Berve は、その事実を無視している点において誤つてゐる。また、僭主 Myrsilos と調停者 Pittakos は、そのような平民の存在を認識し、その支持の必要を理解し、実際、Pittakos は支持の獲得に成功したのであるから、その点に關しても、Page と Berve の主張は不十分であり、周到さを欠いてゐると言わなければならぬ。

Aristoteles は、僭主といふものは、貴族 (Gnoroioi) に對抗する民衆 (demos) や大衆 (plethos) の支持を受けて立てられると述べてゐる。⁽²⁾僭主政に關する通説は、この Aristoteles の見解の線に沿つて構成されてきた。確かに、Mytilene の僭主は、二人ともこの通説の枠に完全に合致するものではなかつた。通説の僭主像は現実の僭主をすべて覆うものではないことを明らかにしている点で、Mytilene の僭主とくに Melanchros は注目に値する。しかし、他方、Myrsilos と Pittakos は、通説の僭主像にいま一步のところまで近付いてゐると言つてよい。Mytilene の二人の僭主と一人の調停者は、これを歴史の舞台への登場の順に並べて観察するとき、やはり通説の僭主像の妥当性を指し示すように思われるのである。

註

- (1) 嚴密には前五世紀末以降の後期僭主と対比される前期僭主のことであるが、本稿ではただ「僭主」と呼ぶ。
- (2) 拙稿「貴族政の発展と僭主政の出現——国制推転のマイナミクス」(『岩波講座世界歴史』第一巻、一九六九年、四六一—八五頁)。
- (3) この他に前六世紀末は Achaemenes 朝ペルシア帝国の Darius I の即位や、また Koes-us の僭主なるもの (Herodotus 4, 97; 5, 11, 37) がある。ペルシア帝国の Mytilene 運送船の遭難に使われた僭主は、この Melanchros, Myrsilos などと、性格を異にするもの。本稿では著者の外に属す。
- (4) D. Page, *Sappho and Alcaeus*, Oxford, 1959 (1955), p. 175-79.
- (5) H. Berve, *Die Tyrannis bei den Griechen*, München, 1967, I, p. 91-95, 2, p. 575.
- (6) Aristoteles, *Politeia* 1311b.
- (7) F. Jacoby, *F. G. H. Ia*, 1957, 4, *Hellenikos von Lesbos* F32, p. 446-47, Penthiolos と Lesbos 島の諸島者としての伝承を Pausanias 3, 2, 1, cf. Strabon 9, 2, 3, C 401.
- (8) Berve, I, p. 91.
- (9) 前註参照。また A. R. Burn, *The Lyric Age of Greece*, London, 1960, p. 239-40 及び Megakles が「大いなる愛人の愛を意味するものから、かれの家族を支配し、無敵にして」。
- (10) Page, p. 151 以下に、本稿が扱った時期の Mytilene 島の幾枚年代の基準を提供するものは、前二冊の *Athenai* の著者 Apollodoros の “Chronika” と、また Diogenes Laertios 1, 75, 79 の伝承 Pitakos の年代である。その中に Pitakos は、イタメーが第四エオリオン紀(前六一二—〇九年)、Mytilene を十年間支配し、その後なお十年間住んで、第五エオリオン紀の第三年(前七〇年)に七十歳以上で死んだとされている。またわが生まれたのは前六四〇年より前、調停者の地位であったのは前五九〇—八〇年である。以上の二つの Pitakos の年代に対して、本文に著した Megakles の事件 Smerdis の事件の推定年代は不適合である。
- (11) Page, p. 150.
- (12) Page, p. 150; A. Andrewes, *The Greek Tyrants*, London, 1956, p. 92-93, 及び Smerdis の事件後の Penthiilai の事件について註(8)・(9)を参照するべきである。
- (13) E. Lobel-D. Page, *Poetarum Lesbiorum Fragmenta*, Oxford, 1968(1955), Carminum Alcaeorum Fragmenta 112, 24; 444, 2-3; cf. Carminum Sapphorum Fragmenta 213, 2-3, 及び 本稿に D. Page, *Supplementum Lyricis Graecis*, Oxford, 1974 及び Alkaios 及び Sappho の註の最も基本的な資料である。この東大教授久保正彰氏の好意により借覧の機会を得た。記して感謝の意を表す。
- (14) Lobel-Page, *Alcaeus fr.* 112, 23; *Sappho fr.* 98, b, 7; *Sfr.* 13, 2, 3, C 617.
- (15) *Archeanaktidai*, *Kleanaktidai* などと、また “anax” (H) などの言葉が含まれるように、高貴の出身であろうことが暗示されている。

- (100) 1192年まで Mytilene は前七世紀のクレタ系人地方で Medyros と Sestros, その後はその後の前六世紀の黒海北岸に Hermonassa 半島の植民市を建設したから R. Herbst, Mytilene, R. E. 16, 1935, col. 1423 が未だそのクレタ系人から黒海方面にわたっては Sigeion 戦争戦時と同じ Mytilene の交易範囲を含められ、したがってクレタ系人の入口に拠点を設けたものとは Mytilene と同じで有用であったが、その場合、例えは与えられた船着場を持つようとした理由で Achillesion からの Sigeion の方がむしろ重要な交通上の要衝だったのである。Hdt. 5, 94 から推測されるように Perandros の調停後 Mytilene が Sigeion の奪還をより確保するために長期にわたって Athenai と争ったように Mytilene と同じく Sigeion の価値を証明する文脈に与えよう。
- (38) P. A. L. Greenhalgh, *Early Greek Warfare*, Cambridge, 1973, p. 70-75.
- (39) この年代状況については第二次 Messenia 戦争の時の Sparta の事情が参考となる。拙稿「第二次メッサニア戦争期スバルタの土地問題」(『学習院大学文学部研究年報』第二四輯、一九七八年、二五—二七頁) 参照。
- (40) 拙稿「貴族政の発展と僭主政の出現——国制推転のメッセニヤ」(四七)頁参照。
- (41) Berve, 1, p. 92. 44 Myrsilos の僭主政の成立と Sigeion 戦争戦の後の置へては Andrewes, p. 93; Burn, p. 241 を同じである。Page もそのへと同様であると思われ、これはその点に因って同じであると思われよう。
- (42) Lobel-Page, Alcaeus fr. 112, 23 c. n.
- (43) Page, p. 174-75; Berve, 1, p. 92; Burn, p. 241.
- (44) Lobel-Page, Alcaeus fr. 305, 15-19.
- (45) Berve, 1, p. 92; cf. Page, p. 180-81. 44 Hdt. 1, 7, 2 以下はクレタ系王国の Herakles 家の最後の王である Myrsos の子 Kandaulos (前六八五年の没) は、キティン人の間では Myrsilos と呼ばれたという。Berve, 1, p. 92-93, 2, p. 573 以下は同じ基について、本問題と同じく Mytilene の僭主 Myrsilos の血筋をクレタ系と推測しよう。本文で扱ったように、この Myrsilos は Kleanakitidai に属したとすべきで、母方によると、例えはリネン人となつたクレタ系人の血筋が混じっていたと考えることが可能であり、また、その中で考えなくとも Kleanakitidai とクレタ系原住民の有力者の間に密接な関係があり、その Kleanakitidai の一員でクレタ系の名前が付けられた想像は、同じく可能である。したがって、この Myrsilos はクレタ系原住民のひながりを保持すべき、したがって、亡命先としてクレタ系本土を選んだと見るのが自然である。
- (46) Lobel-Page, Alcaeus fr. 326.
- (47) Herakleitos, *Questiones Homericæ* 5, p. 6 Oelm (原文 44 Page, p. 188, n. 1 を用いたこと)。
- (48) Lobel-Page, Alcaeus fr. 305, 15, 19-21; cf. Page, p. 181, n. 1, 2.
- (49) Lobel-Page, Alcaeus fr. 6.
- (50) Herakl., *Quaest. Hom.* 5, p. 7 Oelm (原文 44 Page, p. 184, n. 1 を用いたこと)。
- (51) Lobel-Page, Alcaeus fr. 60, a, inf. marg. schol.
- (52) Page, p. 180; Burn, p. 242.
- (53) Berve, 2, p. 573.

- nos' という言葉によって Alkaios が主権意識したのには、
確かで、市民全体のうちで Berve が採りつけたような貴族を
中心とする部があったであろう。
- (69) Andrewes, p. 95-96 は Alkaios が従来通りの貴族の徳を
理想化したという点に同意し、前二〇〇年頃の時代の變化で種
々なことがあつた、と指摘している。
- (70) この点については Athenai とはたして Peisistratos 家の僭
臣政の機會が參考になる。 Cf. Thonik 6, 54, 6; R. Meiggs-
D. Lewis, *A Selection of Greek Historical Inscriptions*,
Oxford, 1969, 6, c.
- (71) Berve, I, p. 93 は Myrsilos の僭臣政が貴族に対して專斷
的になつて、かれらの立つ支持を受けつたといつてゐるが、
それはかれの獨裁政治を明らへ描きつてゐる。
- (72) Lobel-Page, Alcaeus fr. 130.
I, 16-26. この Alkaios の口命は、この時代のあつたた
た不明である。 Page, p. 197-98 は Alkaios の家系は Lesbos
島の内外に何處か口命した可能性があるといつてゐる。
- (73) Berve, I, p. 94.
Meigs-Lewis, 8, c, 2-3.
- (74) Page, p. 177-79.
- (75) Andrewes, p. 98.
- (76) 註 (5) 參照。
- (77) Lobel-Page, Alcaeus fr. 332.
- (78) Berve, I, p. 93; Andrewes, p. 93.
- (79) Burn, p. 241 は Myrsilos を「國家の精神」を唱へてゐる
が、これは、かれの詩に一面に對する考察である。
- (80) Berve, I, p. 93; Burn, p. 242; Andrewes, p. 93. 一方
Page, p. 238-39, cf. p. 197, 223-26 は、この世の Alkaios

- の党派の掃蕩を認めず、かれらに引き續き亡命中と見せら
る。ただし、亡命先としては Lesbos 島の外を考へてゐる
ところがあるが、明確なことは述べてゐない。
- (81) Lobel-Page, Alcaeus fr. 348.
- (82) Arist., *Pol.* 1285a-b. たゞ、この言の「僭臣」の实体
は「執政」のミティラス。だが「執政」という aisymetes
の用語は、山本木雄児「政治学」(『ヘリストナリス全集』第
一五卷、筑波書店、一九六九年、一三三—一三三頁)より採
じた。
- また、この文を素直に讀むと Alkaios の党派が敗れ
た、たゞ Mytilene から亡命したのが、Pittakos が執政
に任命された、と考へられる。 Berve, I, p. 93, 2, p. 574
は、これを解釋して、Burn, p. 243 は順序を逆にしてゐ
る。他方、Andrewes, p. 93 は亡命の方が先と認めるが、
Pittakos を執政に任命したのは、亡命者たちがもう一度
歸郷を乞ふ、Mytilene が重大な危機に直面した、とのこと
をいふ。
- (83) Page, p. 176-77; Berve, I, p. 94.
註 (5)・(9)・(10) 及び註 (5) に於ける本文參照。
- (84) Lobel-Page, Alcaeus fr. 432 = Str. I, 2, 30, C37.
- (85) Lobel-Page, Alcaeus fr. 350.
- (86) Jacoby, *F. G. H. IIB* 239. *Marmor Parium* A36.
- (87) Berve, 2, p. 575; Burn, p. 243-44; Andrewes, p. 93; cf.
Page, p. 223.
- (88) Lobel-Page, Sappho fr. 203 = Athenaios 425a; cf. Athen-
424e.
- (89) Page, p. 131, c n. 2.
- (90) Page, p. 225-26.

- (120) なわれていた。 Cf. Andrewes, p. 98.
Andrewes, p. 98-99の見解は、本文で述べられた考えに近い
が、Pittakosの反貴族的立場を強調しすぎているように思
われる。
- (121) 註(4)・(5)に対応する本文参照。 参考 R. Drews, *The
First Tyrants in Greece*, Historia 21, 1972, p. 129-44,
esp. 143-44は、前七世紀に出現した最初の僭主について、
かれらを、重装歩兵としての農民の政治意識の向上、新しい
商人層の出現、ドーリス人と非ドーリス人の対立といった客
観的条件の産物と見るよりも、重装歩兵である傭兵の武力に
よって自己の目的を達成した野心家と解すべきであると主張
している。 Drews のこの見解は、Mylèneの場合で言え
ば、僭主や調停者がもっぱら貴族の党争の中から現われたと
説く Page や Berve の立場に親近性を持つと言いうことがで
きる。
- (122) Arist., *Pol.* 1310b.

(一九七九・一一・一〇)